

第11部会

少数派フィクフの理論と論客

——イスラーム法の新潮流——

松山 洋平

ムスリムの「少数派」としての地位は、少なくとも八世紀にはフィクフ学的な問いの一つであり、主要フィクフ学者の関心事であり続けた。しかし、近現代において「少数派ムスリム」と称される存在は独自の地位を有している。彼ら（特に欧米に居住するムスリムたち）は、時間的パースペクティブにおけるイスラームと現代との接点として、そして同時に、空間的パースペクティブにおけるムスリムと非ムスリムの接点としての存在意義を有している。現代性の解釈と、非ムスリムに対する態度決定は、近代以降のムスリムが抱える根本的な課題を構成する二大要素である。それらの問題を最前線で直接的に担う欧米のムスリムを取り巻く社会空間は、「ウンマ」の未来を占う大きな実験施設として機能していると言えよう。

そのような背景の下、一九九〇年代に「少数派フィクフ (fiqh al-aqaliyyat al-muslimah)」という概念が、アメリカに拠点を置くイラク出身のウラマー、ターハー・ジャービル・アル＝アルワニー (Taha Jabir al-Alwani) によって提唱された。この新しい学問分野は、二〇〇〇年代にはムスリム知識人の間の周知の関心事となり、タールイク・ラマダーン (Tarig Ramadan) 等「非ウラマー知識人」を始め、古典主義的ウラ

マー層の間でもその妥当性が議論されるようになる。その急速な議論の広がりは、欧米のイスラーム教育機関や研究機関に留まらず、中東の宗教者会議などにおいても可視化している。

少数派フィクフに関わる理論的争点は、大きく以下の二点に収斂される。第一に、「少数派ムスリム」に特化したフィクフを論じる余地がそもそも存在するのかという根本的な問題がある。ウラマー層はこの問題について立場を明確にしている場合が殆どであり、少数派フィクフを擁護する陣営と、反少数派フィクフの陣営に分かれ、対立している。

第二の争点は、「少数派ムスリム」に特化したフィクフの存在を認める場合、その理論をどのように構築するかという問いである。特に、「古典的フィクフ」或いは「一般フィクフ」との関係性を如何に規定するかが問題となる。この点に関連させて、少数派フィクフの論客を三つに類型化することが可能である。第一に、少数派フィクフと古典フィクフの間の連続性を否定し、現代的なイジュティハードによって新たに創造される領域として少数派フィクフを捉える、「脱古典フィクフ型」の論客。第二に、古典フィクフに内在する諸原則によって少数派フィクフの構築を試みる「古典フィクフ立脚型」の論客。第三に、古典的学説の列挙によって少数派フィクフを論じる「形式的少数派フィクフ」の論客である。

少数派フィクフの実践的意義に関しては、例えば次の二つを挙げることができる。第一に、非ムスリム社会においてムスリムが政治的影響力を獲得するための理論的素地を提供する概念として、少数派フィクフを捉えることができる。第二にそれ

は、より多くの一般信徒を「シャリーアの言説」に引き込むことで、一般信徒に対するウラマーの権威を回復し、ウラマーが欧米において新たな支持層を獲得するための有効なツールとして機能する可能性を秘めている。

少数派フィクフは、現代イスラーム思想、宗教間対話、アイデンティティ・ポリティクス等、様々な問題系と直接的連関を有する概念であり、今後の研究の深化が期待される。

「俗人」説教師の活躍と

イスラムにおける権威の問題

八 木 久 美 子

本発表では、「イスラム版テレビアンジェリスト」とも呼ばれ、近年注目を集めている新しいタイプの説教師について論じる。彼らは西洋的な文化や生活様式に親しんでいる富裕層から支持を受けており、この事実が、イスラム復興を経済的不安や社会的な剝奪感によって説明しようという試みを無効にする。

ただここで注目したいのは、こうした新しい説教師たちが、ウラマーとは認知されていないにもかかわらず、説教師として成功していることが提起する権威の問題である。本発表では、このタイプの説教師として圧倒的な知名度を誇るアムル・ハーレド（一九六七）を中心にエジプトを例にして論を進める。

ハーレドはいつも高価なスーツを身にまとい、衛星放送やイ

ンターネットといった新しいメディアを使いこなし、流暢な英語を話す。それどころか彼には宗教についての本格的な教育を受けた経歴がなく、広くウラマーと認知される可能性はまったくと言っていいほどない。彼の後継者とも言えるムイッズ・マスウッド（一九七八）はさらにその上を行き、教育背景も生活スタイルもまさに、アメリカ文化の申し子である。

ハーレドが訴えるのは、イスラム共同体の再生であり、その方法を「信仰による成長」と呼ぶ。一人ひとりの信仰心に基づく行動が社会全体を成長させるという主張であり、そこには政治化に向かう可能性はない。組織化も目指されない。また彼が語るイスラムとは、法でも儀礼でもなく、信仰であり、さらには道徳だという点も重要である。

こうした説教師たちに特徴的なのは、聴衆を語りの場に引き込もうとする姿勢である。ウェブサイトにはフォーラムが用意されている。ごく身近な問題についてコランやハディースを引きながら議論して見せる。こうして彼らは、人々にイスラムについて考え語るレファレンス・ポイントを提供するのである。権威ある解釈を提供するのではない。

ウラマーとの関係に關していうと、彼らは意識的に差別化を行い、ハーレドは自ら、自分はウラマーではないと明言する。重要なのは、現代のエジプトでは、宗教省から任命されて特定の職に就くなど、国家権力との近接性がウラマーたる基準のひとつと見られているという点である。それは言い換えると、ウラマーの人々の日常からの乖離である。

歴史を振り返ると、公権力のそばにいたウラマーと一般信徒